

『今月の天候と農作業』

通巻第5713号

7月号

令和7年7月2日発行

宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

特になし。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率60%です。

<1 週目の予報> 7月4日(土)～ 7月10日(金)

梅雨前線や湿った空気の影響を受けにくいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

<2 週目の予報> 7月11日(土)～ 7月17日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 7月18日(土)～ 7月31日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 水管理と病虫害防除

収穫直前までの水管理は間断かん水を基本とします。落水の目安は、収穫5日前です。

特に、出穂後に高温が続いた場合には、白未熟粒の発生による品質低下を防止するため、飽水管理を実施し、稲体の温度低下に努めましょう。

カメムシ類の被害防止のため、穂揃い期とその7～10日後の2回防除を徹底しましょう。さらに、発生が多い場合には追加防除を行います。

2 収穫と乾燥調製

収穫適期は全籾の8割が黄化した時期です。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は40℃以下で行います。毎年、過乾燥の玄米が多く見られるため適正水分の14.6～15%に仕上げましょう。

◆普通期水稻

1 水管理と病虫害防除

中干しは茎数が20本程度の頃に始め、遅れないようにしましょう。田面に足跡が軽く付く程度に干し、実施後は走水を1～2回行い、その後は間断かん水を行いましょう。

また、葉いもちやウンカ類の予察情報に注意し、ほ場をよく観察して適期防除に努めましょう。

2 追肥

穂肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が1cmの頃が適期です。必ず葉色を確認し、適正な量を施用しましょう。

◆大豆

1 ほ場準備と播種

土壌はpH6.0～7.0となるよう苦土石灰で酸度矯正を行い、基肥量は前作を考慮して調整します。湿害防止のために、ほ場の周囲には排水溝を設置しましょう。

播種は、発芽安定と鳥害軽減のための薬剤を粉衣し、条間60～70cm、株間21

cmを目安とします。なお、播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(前畑 祐喜)

果菜類

◆夏秋野菜の高温対策等

露地きゅうり、雨よけトマト類、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では、梅雨明け後の高温対策が重要であるため、日中はハウスを開けて換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用して2～3割程度の遮光を行います。ハウス内の気温をなるべく下げること、果実・葉の温度が上がらないように管理します。また、循環扇を利用すると、温度上昇が抑えられます。

曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるため、早朝または前日夕方からかん水を行い、萎れを予防しましょう。

薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の薬害が発生しやすくなるため、午前中の早い時間帯か、午後の気温が低下する時間帯に行いましょう。

トマト類では、トマトキバガの発生が増加していますので、早期発見に努め、残さは、ほ場外に持ち出す等、適正に処分しましょう。

◆いちごの育苗管理

定植までの日数を逆算し、7月中旬頃には必要数の子苗を確保し、良質苗の生産に努めましょう。採苗後のかん水は、晴天時には早朝に十分な量を行いますが、日中に乾燥するようであれば、過湿にならない程度で夜間にかん水を追加しましょう。特に、採苗する際に、ランナー先端の子株の不定根が茶色く変色しているときは、親株へのかん水の量や回数が不足していることが考えられるため、かん水方法や量を見直しましょう。

病虫害防除では、炭そ病に対する定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には、周辺の株とあわせて直ちに処分しましょう。また、うどんこ病の予防のために、ケイ酸カリを1株あたり2～3g施用しましょう。

(川畑 康憲)

葉茎根菜類・いも類

◆かんしょ

生育が不良の場合、地際の茎を確認します。茎が黒～褐色に変色または割れている場合は、サツマイモ基腐病や茎根腐細菌病、つる割病等に感染している可能性があります。そのような場合は、生育不良の株を袋に入れてほ場の外に持ち出すとともに、ほ場全体に殺菌剤を散布し、感染拡大を防ぎます。

排水不良のほ場は、病害拡大の恐れがあるため、排水路の点検・整備を行いましょう。また、種いも生産ほ場に入るときは、病原菌を持ち込まないように、農機具や長靴は洗浄したものを 사용합니다。

採苗が終わった育苗ほ場は、夏場の間に残さ分解を促し、土壌消毒をしましょう。

◆さといも

疫病対策として、殺菌剤を定期的に散布します。特に、台風後には治療効果のある殺菌剤を散布しましょう。

石川早生は下旬頃から収穫期となります。収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、適期に収穫します。

◆しょうが

上旬頃は追肥の時期となります。10a当たり窒素成分で3～5kgを施用し、土寄せを行いましょう。その後、土壌の流亡防止や地温の上昇抑制のために、敷きわら等をするとう効果的です。また、梅雨明け後は、土壌が乾燥しやすいため、かん水を行います。

◆秋冬野菜の土づくり

野菜の収量・品質向上には、夏場の土づくりが重要です。土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥による土づくりを行います。

(倉永泰代)

果樹

I 常緑果樹

◆ かんきつ全般

雨天日が多くなり、黒点病の防除が特に重要な時期となります。薬剤散布から合計300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250mm程度の降雨があったら、晴れ間を利用して薬剤散布を行いましょう。

◆ 温州みかん

7月中旬から収穫前までは仕上げ摘果の時期です。今年は園地や樹により着果量のばらつきが多い傾向にあるため、結果量を確認して摘果を実施しましょう。極早生品種の7月10日の果実横径は、38～48mmが理想です。

◆ 完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色かび病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を徹底するとともに、枝をゆすって、花びらを落としましょう。ビニル被覆を行っている園地は、高温による結果不良が出始めるため、梅雨明け後は早めに天井ビニルを除去しましょう。

◆ マンゴー

炭そ病や軸腐病の発生が多くなる時期です。こまめな収穫や、殺菌剤の散布を徹底しましょう。また、梅雨明け後は強い日射により日焼けが発生しやすくなります。遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫後は、剪定作業を行います。7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になるため、早めに剪定を行いましょう。また、枝の切り口にはペースト剤を塗布します。

剪定が終了し、新梢が発生している早期作型園では、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤を利用することで、新梢の充実促進を図りましょう。

(前田 優香子)

花 き

◆キク共通

梅雨明け後は、日差しの強い日が続くため、葉焼け等が発生しやすくなります。遮光や換気を積極的に行い、葉温を下げるとともに、蒸散量の増加に合わせ、適宜かん水を行います。また、健全な穂を確保するために、親株床での病虫害防除を徹底しましょう。

◆夏秋ギク

「精の一世」の8月出荷作型では、花芽分化・発達を促すために、消灯後から11、5時間日長でシェード管理を行います。なお、高温により開花遅延や奇形花が発生しやすくなります。日中の換気に努め、夜間のシェード開放を行いましょう。

「フローラル優香」では、消灯後から2週間程度、12時間日長でシェード管理を行います。なお、高温や消灯遅れ、多肥は貫生花の発生を助長するため、適正管理に努めましょう。

◆洋花類共通

秋に定植予定のほ場は、土壌分析結果に基づいた適正施肥を行うとともに、病害や連作障害を回避するために、土壌消毒を実施しましょう。なお、太陽熱消毒を行う場合、開始時期が遅くなると、十分な消毒効果が得られない恐れがあるため、早めに準備を行いましょう。

◆ホオズキ

8月出荷分は、上旬から段階的に摘心及び着色のためのホルモン剤散布の時期です。効果を安定させるために、散布の前後5日間は病虫害防除を控えましょう。また、散布後の高温は着色不良の原因になるため、涼しい時間帯に散布し、散布後数日は必ず寒冷紗で遮光しましょう。

◆キイチゴ

過度な収穫をすると、乾燥により樹勢が低下して枯死する恐れがあります。樹勢維持のために太めの枝を数本残し、長期間降雨がない場合はかん水を行いましょう。

(川崎 真和)

畜産

◆家畜防疫対策

4月に県内の養豚農場で豚熱（CSF）感染が確認されましたが、それ以降も、野生イノシシでは感染が相次いで確認されています。

また、近隣諸国では様々な家畜伝染病が確認されており、国内への侵入リスクは依然として高い状態が続いています。

家畜伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒や人・車両・物資の消毒、野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づき飼養管理を行いましょう。

◆家畜

梅雨明け前後は、気温・湿度の変動が大きく、家畜が強い暑熱ストレスを感じる時期です。これにより、乾物摂取量の減少による乳量・乳質の低下、受胎率の低下、事故率の上昇など、生産性への悪影響が懸念されます。

畜舎内には温湿度計を設置し、必要に応じて細霧装置の活用、換気扇による送風で体感温度を下げるほか、寒冷紗の設置や、屋根への石灰・断熱塗料の塗布など、複数の対策を組み合わせる暑熱対策を徹底しましょう。

また、高温多湿により飼料が腐敗しやすい時期です。カビや異臭を確認した場合は給与しないようにしましょう。餌槽や水槽の汚れもカビの増殖や食欲低下を招くため、こまめな清掃を心がけましょう。

◆飼料作物

梅雨明け前後は病害虫の被害が出やすくなります。こまめに圃場を確認し、被害が確認された場合は、速やかに防除を行いましょう。

また、飼料用イネは雑草が繁茂しやすい時期です。カメムシ等の害虫の密度を下げるためにも、畦畔を含む除草管理を徹底しましょう。

（長瀬 朋子）

特用作物

◆茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程度で三番茶の摘採期となります。この時期は、新葉の硬化が早いため摘み遅れに注意しましょう。また、燃料の価格が高騰しているため、荒茶の価格と経費を考慮し、計画的な摘採に努めましょう。

2 病虫害の防除

新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ等に注意してください。また、輪斑病に弱い品種は摘採後速やかに防除を行いましょう。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園は、中切り後60日程度と8月上旬の2回整枝を行います。また、二番茶後に深刈りした茶園は、8月上旬までに1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5節上げた位置で行います。特に、中切りした茶園では日焼け防止のために、2回に分けて整枝を行いましょう。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意が必要です。土寄せや敷きワラ等を行い土壌の乾燥を防ぎます。

また、1～2年生の幼木園は、台風に備え7月中～下旬に徒長枝の摘心やせん枝を行います。

(新 正仙)

◆しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木は30～40cm程度の厚さとし、雨水が原木に均一に掛かるような掛け方とします。笠木幅は伏せ込みの高さ程度横に張り出し、原木に直射日光が当たらないようにしましょう。特に、西日が当たらないように、列の向きや笠木の張り出しを調整する等の注意が必要です。また、害菌発生を防ぐため、周囲の刈払いを実施しましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置し、被陰をします。遮光ネットとほだ木の間は20cm程度の空間を確保し、側面の両サイドは裾を広げ通風を図ります。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、林縁の草刈りを実施しましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害や害菌の侵入を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水などにより、温度と湿度の細かな管理を行いましょう。

(荒砂 美月)

関連情報

農作業安全

熱中症による死亡者数は7～8月に集中しています。また、特に体が暑さに慣れていない梅雨明けには救急搬送される人が急増します。

このため、日中は、高温時の作業を避けるとともに、作業中には、こまめな休憩や20分おきの水分補給を行うことで、熱中症の予防に努めましょう。

(前畑 祐喜)

◆農薬適正使用

6月1日から8月31日までの3か月間は農薬危害防止運動を実施しています。

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法を確認します。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意します。

農薬散布後は、必ず散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄します。

県内においても、過去に残留農薬基準値を超過した事例や、誤った方法で使用した事例が確認されており、十分な注意が必要です。

特に、農薬ラベルの確認不足、隣接ほ場への飛散、散布器具の洗浄不足が原因の事故・違反が多いため、細心の注意を払いましょう。

また、国内において、毎年クロルピクリン剤による事故が発生しています。クロルピクリン剤による土壌消毒を行う際は、必ず保護メガネと防護マスクを着用し、処理後速やかに被覆を行うなど、使用方法を遵守しましょう。

(農業普及技術課)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	いもち病（穂） 紋枯病	並 並	上位葉の葉いもちは、穂いもちの発生につながるため、穂ばらみ期後期と穂揃期に防除を行いましょう。その後も降雨が続き、穂いもちの発生拡大が予想される場合は、穂揃期の 7～10 日後にも追加防除を行いましょう。
	セジロウンカ 斑点米カメムシ類※	少 多	セジロウンカは、多発生時に一部の飼料用イネ品種で吸汁被害が生じる場合があるため、注意が必要です。 斑点米カメムシ類の発生が多くなっています。斑点米カメムシ類による被害は、早期米の等級格下げの主要因であるため発生に注意し、穂揃期とその 7～10 日後の 2 回防除を徹底しましょう。防除後も残存虫が確認される場合は、さらに追加防除を行いましょう。
普通期水稻	いもち病（葉）	並	いもち病は、本田での初発生に注意し、早期防除に努めましょう。
	セジロウンカ コブノメイガ スミリンゴガイ	並 一 並	移植時に箱施薬をしていない水田では、防除が手遅れにならないように注意しましょう。 セジロウンカ、コブノメイガの海外からの飛来が確認されています。海外飛来性害虫の本県への飛来状況は、当センターのホームページ等で随時情報提供していますので確認してください。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ タバコガ・オオタバコガ	並 やや多 やや多	アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介するため、早期発見に努め、早めに防除しましょう。 ハスモンヨトウ、タバコガ・オオタバコガの発生が多くなっています。チョウ目害虫の幼虫は老齢期になると防除効果が不安定になるため、若齢期を中心に防除を行いましょう。発生状況は当センターのホームページで随時情報提供していますので、確認してください。
施設野菜	黄化えそ病 (MYSV)	一	媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を下げるため、定期的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めましょう。
サトイモ	疫病	一	圃場の見回りをを行い、発生を認めたら直ちに、薬剤が下葉に達するように十分量を散布しましょう。
サツマイモ	基腐病※	一	発病株（つるや塊根）は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにし、定期的に登録のある薬剤で防除しましょう。なお、散布する際は、株元にしっかりと薬液がかかるように注意しましょう。
果樹全般	果樹カメムシ類	一	予察灯への果樹カメムシ類の直近 1 か月の誘殺数が平年より多い状況です。果樹カメムシ類は、飛来が多くなってからの防除では手遅れとなるため、園内外を見回り早期発見、早期防除に努めましょう。
カンキツ (露地栽培)	黒点病 そうか病 かいよう病	やや多 並 やや少	黒点病の発生が多くなっています。枯枝は有力な伝染源となるため、園外に持ち出し適切に処分しましょう。また、降水量が多いほど発生が多くなるため、前回の防除から積算降水量 250mm を散布間隔の目安として薬剤散布を行いましょう。
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	ミカンハダニは、生息密度が高くなると防除が困難になるため、1 葉当たり虫数 0.5～1 頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病	並	炭疽病は、新芽の生育期に雨が多いと発生が多くなります。二番茶の残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1 葉期を重点に防除しましょう。
	チャノコカクモンハマキ	並	
	チャハマキ	並	
	チャノホソガ	並	
	カンザワハダニ	並	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマにより新芽が加害されると減収や品質低下を招くため、萌芽期から開葉期にかけて薬剤散布を行いましょう。
	チャノキイロアザミウマ クワシカクガラムシ	少 やや多	ハマキムシ類、チャノホソガの発生消長は、当センターのホームページで随時情報提供していますので確認してください。

1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は病害虫発生予察注意報又は病害虫防除情報を発表中です。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、QR コードより閲覧してください。

